

< 2016年 8月 >

古賀 順子

パリ・プラーージュ

今年も、夏のパリ風物詩「パリ・プラーージュ Paris Plages 2016」が始まりました。

ポン・デ・ザール、ポン・ヌフ、ポン・ノートル・ダム、ポン・ルイ・フィリップの橋下を走るセーヌ河右岸「ジョルジュ・ポンピドゥー道」を通行止め、白い砂、椰子の木、長椅子、パラソルなどを設置し、7月20日から8月21日まで、セーヌ河沿い道路が「パリの浜辺」に変身します。

パリ市が主催する「パリ・プラーージュ」は、2002年、当時のパリ市長ベルトラン・ドラノエの提唱でスタートします。「ジョルジュ・ポンピドゥー道」は、1995年から毎日曜日、歩行者に開放されていましたが、エコロジストの社会党員ドラノエがパリ市長に選出(2001年)され、翌年から「パリ・プラーージュ」が実施。夏のバカンスで遠くへ行けない子供たち、パリに残って働く人たちなどのパリ市民や観光客に、浜辺のバカンス気分を味わってもらう目的です。

今夏は、画家アルベール・マルケ(1875-1947)野外展覧会、園芸アトリエ、タイチ(太極拳)教室、ベビー・フットなどが用意され、簡易なカフェや売店も開いています。パリ市庁舎前広場では、「FNAC ライブ・フェスティバル」と題して無料のコンサートも行われ、ビーチ・バレー、ペタンク場など、市民に夏を満喫してもらう多くのイベントが準備されています。少し離れたラ・ヴィレット会場では、水遊びやボートを楽しむこともできます。

ところが、今年は心ここに在らずの行事になりました。フランス共和国を象徴する7月14日「パリ祭」の夜、ニースの海岸で花火を楽しんでいた人たちが犠牲になる悲惨なテロ事件が起きました。昨年11月13日パリ10・11区で同時多発的に起こったテロ事件から8ヶ月が過ぎ、オランダ大統領は、テロ警戒態勢を終了しようとしていた矢先の出来事です。

19トンの保冷運搬トラックで、2kmに渡って歩道の見物客を轢いていくという予想外の殺戮行為です。犯人は、31歳のチュニジア人モハメッド・ラウアイエ・ブレルで、テロリスト要注意人物ではなく、イスラム過激派勧誘サイトの暴力場面ビデオに触発され、綿密に犯行を計画しています。これまでのテロ事件と違って、爆弾や機関銃のような武器を使わず、大型トラックという身近な手段で犯行を実行。いつ、だれが、どこで、どんな手段で暴力行為に至るか分からない危機感を見せつけました。どんなに警戒しても完璧な防護策はなく、終わりのない泥沼感が強くなってきています。

ニースのテロ事件では、国はしかるべき安全体制を取っていたか、という論争がクローズアップされています。プロムナード・アングレーズ通りは、車の通行が禁止されていたにも拘らず歩道に乗り上げ、爆走を止められなかったのは何故か・・・テロ警戒態勢で行われる「パリ祭」花火大会の警備は万全だったか・・・車道にはニース市管轄の警察の車が一台止めてあっただけで、歩道には何の対策もされていなかった・・・3万人が集まる海岸を警備するのに必要な警察の数だったのか、様々な議論が続いています。7月17日(日)夜のテレビで、前大統領ニコラ・サルコジは、「ヴァルス政権は、万全なテロ対策を取っていなかった」と批判声明を発表するなど、来年5月の大統領選挙に向けての政治色も強くなっています。

フランス全土で、様々な夏のフェスティバルが予定されていますが、安全を確保できないために中止される例も少なくありません。「パリ・プラーージュ」も開催が危ぶまれましたが、警官数を増やし、出入り口にはパトカーを配置し、安全を強化する形で実施されています。昨年までと比べると、人出は目に見えて少なく、銃を持った警官や軍隊に守られてセーヌ河岸を散歩するのは、複雑な心境です。7月15・16日には4機の戦闘機でイスラム国を攻撃しているフランス、7月26日にはルーアン郊外の小さな教会で司祭が殺害され、フランスは戦争をしている国なのだと感じざるを得ません。